蛇足

作者

劉向

前七七年頃～前六年。前漢最大の儒者。子の劉歆（りゅうきん）と共に宮中の図書を整理校訂して解題を加え、これが後に「漢書芸文志」の基礎になった。漢王室の親戚としての使命感から政治のことにも関心を失わず、たびたび上奏して当時専権を振るっていた宦官や外戚を弾劾し、獄に下されたこともある。著書に「新序」「列女伝」「説苑」などがある。

出典

戦国策

三十三巻。早くから錯乱していたのを劉向が校訂して三十三巻としたと伝えられる。周の元王から秦始皇二十五（前二二二）年まで二百四十余年間の戦国時代の遊説家の権謀術数およそ四百八十章を、国別（東周・西周・秦・斉・楚・趙・魏・韓・燕・宋・衛・中山）に収録したもの。説客たちが諸侯に進言したり、他国に使節として派遣されたりしたときの命を賭けた弁舌が中心で、その中に多くの寓話がちりばめられており、議論文としても出色のものである。なお「戦国時代」の名称は、この「戦国策」に書かれている時代との意味である。本文は「斉策上」からとった。

本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　戦国策　上」（林秀一著）によった。

参考文献

❊ **教師用**

▽**注釈書**

「戦国策」（中国古典文学大系）常石茂　平凡社　昭四十七
「戦国策」（全釈漢文大系）近藤光男　集英社　昭五十
「戦国策」（新釈漢文大系）林秀一　明治書院　昭五十二

❊ **生徒用**

「戦国策」（新書漢文大系）林秀一　明治書院　平八
「故事成語で中国を読む」（ちくま文庫）多久弘一　平二十

要旨

もともとあり得ない蛇の足を絵に描いたために賭け事に負けてしまった男の話を通して、物事の余計な付け足しはしないほうがいいとの教訓を述べたもの。

構成

全文一段落。

訓読と現代語訳

①楚に祠る者有り。②其の舎人に巵酒を賜ふ。③舎人相謂ひて曰はく、「数人にて之を飲まば足らず、一人にて之を飲まば余り有り。請ふ地に画きて蛇を為り、先づ成る者酒を飲まん。」と。④一人の蛇先づ成る。⑤酒を引きて且に飲まんとす。⑥乃ち左手もて巵を持ち、右手もて蛇を画きて曰はく、「吾能く之が足を為る。」と。⑦未だ成らざるに、一人の蛇成る。⑧其の巵を奪ひて曰はく、「蛇固より足無し。子安くんぞ能く之が足を為らんや。」と。⑨遂に其の酒を飲む。⑩蛇の足を為る者、終に其の酒を亡へり。

①楚の国に司祭者がいた。②（あるとき司祭者は）その召し使いたちに大杯に満たされた酒をふるまった。③召し使いたちは相談し合って言うには、「この酒は何人もで飲めば足りないが、一人で飲むなら余るほどある。地面に蛇の絵を描いて、真っ先に描きあげた者がこの酒を飲むことにしよう。」と。④その中の一人が真っ先に蛇を描きあげた。⑤酒を引き寄せて飲もうとした。⑥そして左手で杯を持ち、右手で蛇を描きながら言うには、「俺はこいつに足だって描けるぞ。」と。⑦（真っ先に蛇の足を描き上げた召し使いがその足を）まだ描き終わらないうちに、もう一人が描いていた蛇が出来上がった。⑧（真っ先に蛇の足を描き上げた召し使いが持っていた）杯を奪い取って言うには、「蛇にはもともと足なんかない。あなたはどうして蛇の足を描けるのか（いや描けるはずがない）。」と。⑨そのままその酒を飲んでしまった。⑩蛇の足を描こうとした者は、結局（一度手にした）酒を（とられて）失ってしまった。

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶ 中学校で学んだ故事成語や、生徒が知っている故事成語を挙げる。資料集を参照してもよい。

❶ 中学校で学習した故事成語を発表させ、共有する。中学校の教科書を基にしたプリントや、資料集を活用し、知っている故事成語を整理、確認させるとよい。

発展

学習活動のポイント

❶ 指導者の範読を聞き、訓点に従って本文を目で追う。

❷ 書き下し文をノートに書く。知技(2)ウ

〔「学習のポイント」1〕

❸ 脚注を参照して現代語訳し、疑問点を指摘する。

❹ 再読文字の用法を確認する。知技(2)ウ

❶「訓読の世界」（P一一七～一一三）を踏まえ、各自で音読し、読む順番の分からない箇所、読めない漢字を確認する。その後範読で正しい訓読を確認し、ペアまたは各自で繰り返し音読することで漢文の口調に慣れさせる。大体読めるようになったら指名読みや一斉読みで定着を図る。

❷「書き下し文のまとめ」（P一一三）を参照し、「不」・「之（の）」を平仮名で書き下すことを確認する。

書き下し文の作成はあくまでも初学の段階での訓読の補助・活用や接続を確認する手段であり、書き下すことが目的ではないことを伝えるとよい。

《板書例》

数人飲（ニテ）レ之（マバヲ）不レ足（ラ）、
1 2 4 3 6 5

数人にて之を飲まば足らず、

引（キテヲ）レ酒（ニ）且（マント）レ飲。
2 1 5 3 4

酒を引きて且に飲まんとす。

＊一度目の読みは漢字、二度目の読みは平仮名にする。

未レ成（ダラ）
3 1（ルニ） 2
未だ成らざるに、
＊一度目の読みは漢字、二度目の読みは平仮名にする。
一人之蛇（の）成（ル）。
1 2 3 4 5
一人の蛇成る。
＊日本語の助詞・助動詞にあたる漢字は平仮名にする。

【評価】ノートに書かれた書き下し文を確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまりを理解しているか、分析する。

❸全文を現代語訳してもよいし、「請画レ地為レ蛇、先成者飲レ酒。」「引レ酒且レ飲。」「吾能為二レ之足一。」「未レ成」「蛇固無レ足。」「子安能為二レ之足一。」など一部分を指定して現代語訳（残りは現代語訳を配付）してもよい。

脚注を用いて逐語訳をし、意味の分からない漢字は辞書を引く。本文中の重要単語は巻末の「漢文の重要単語」（P三三五・三三六）を参照する。

現代語訳も書き下しと同様、本文の理解を助ける手段であり、現代語訳することが漢文読解の目的ではないことを確認する。現代語訳を通じて内容を理解した上で、登場人物の関係や行動の理由などについての疑問を挙げてみる。

❹再読文字を二度訓読する理由、訓読・書き下し上の決まりについて確認する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶「蛇足」は、どのような失敗談なのか説明する。
思判表B⑴イ〔「学習のポイント」2〕

❷「蛇足」の意味を調べ、身近な「蛇足」の例を探す。
知技⑴ウ・エ、⑵イ・エ　主態〔「言葉と表現」1、「言語活動」1〕

❶「学習のポイント」2の解答例を参照。
【評価】「蛇足」はどのような失敗談なのかを的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

❷「言葉と表現」1、「言語活動」1の解答例を参照。
【評価】故事成語「蛇足」の由来や意味と、現代の言葉とのつながり理解し、身近な「蛇足」の例を考えようとしているか、行動を点検したり、ワークシートの記述を確認したり、振り返りシートの記述を分析したりする。

発問例

●一二六ページ

問　**楚のある長江中流域はどこか、地図で確認せよ。**

補　教科書の後ろ見返しにある「中国新旧参考地図」を使ってもよい。この話の場合は場所を特定することに特に意味はないが、一般的に漢文の学習において歴史と地理とが不可分の関係にあることを折りに触れて意識させたい。

問　**「数人飲レ之不レ足」（3行目）について、**
1　**ここでの「之」は何を指すか。**
2　**「不レ足」とあるが、なぜ「不足」となるのか。**

答　1 司祭者からふるまわれた大杯の酒。
2 数人で分けて飲むと、一人の飲む量があまりにも少なくなるから。

問　**「一人飲レ之有レ余。」（3行目）とあるが、なぜ一人で飲めば「余」るのか。**

答　大杯に満たされた酒の量が多いから。

問　**「請画レ地為レ蛇、先成者飲レ酒。」（3〜4行目）について、**
1　**「請」は、訓読上どの部分と呼応しているか。**
2　**なぜこのような相談をしたのか。**

答　1「飲レ酒」の部分。

語句の研究

●一二六ページ

1蛇足　余計な付け足し。無用のもの。

2祠者　神霊を祭る者。司祭者。祭祀をつかさどる神主。

2賜　上位者が下位者に財貨を与える。ここでは司祭者が召し使いに酒を与えたことを指す。「賜」は英語の第四文型（ＳＶＯＯ）のように「動詞＋人＋物」（人に物を〜）という語順を取る。

2舎人　王侯貴人の側近くに仕えて雑務をつかさどる者。後、近侍の官名となった。ここでは、召し使いのこと。

2巵酒　「巵」は四升（約〇・八リットル）入りの大杯。供えものの神酒を下げ渡したものであろう。

2相謂　相談する。ここでの「相」は、動作が両方からかかり合うことを示す副詞。「互いに・・・し合う」。

3請画レ地為レ蛇、先成者飲レ酒　「請」は自分の考えを述べて賛同を求める気持ちを表す。願望形。他人の動作に関わる場合は「こフ…セヨ」と命令形に読み、「どうか…してください」と訳し、自分（たち）の動作の場合は「こフ…セン」と読み、「どうか…させてください」の意だが、ここでは舎人全員の同意を求めているので、文意に合わせて「…しよう」と訳す。「為」は、「する・行為を行う」の意。ここでは蛇の絵を描くこと。「成」は、「完成する」の意。ここではその絵が出来上がること。

4且レ飲　「且」は「将」と同じく、「まさニ…（ント）す」と読み、「…しようとする」の意。事柄に関して「やがて…になろうとする」という場合と、意志に関して「これから…しようと思う」の意になる場合とがある。ここでは後者。

4乃　「乃」の前後の行為や事情が密接に結びつく場合は「そこで・そして」と訳す。前後の文に時間的・心理的断絶や屈折がある場合「なんと」「かえって」「やっと」などと訳す。ここでは「なんと」と訳してもよい。

5吾能為ニ之足一　「能」は、「能力があってできる」意。同じ可能でも「可」は「状況・道理からしてすることが許されてできる」、「得」は「機会があってできる」意。したがってここでは確かに「吾能為ニ蛇足一」であったかもしれないが、道理のうえでは

[2]何人もで飲めば足りないが、一人で飲めば余るほどの酒の量があるから。

補 [1]願望形の呼応を確認する設問。話者が自分で何かしたいときには意志の助動詞「ん」、相手に何か頼みたいときには命令形にする。

問 「先成」（4行目）の「成」、および「吾能」（5行目）の「能」の意味を、それぞれ熟語を作って考えてみよ。

答 完成・可能

補 漢文を解釈するとき、あるいは漢字の意味を知りたいとき、二字の熟語を作って考えると有効であることを理解させ、習慣づけたい。

問 「左手」「右手」（5行目）の「（モテ）」はどういう意味か。

答 「…で」の意。

補 「もて」は「もつて（以て）」のつまった形。「…で」の意にあたる漢字が原文にないので、送り仮名で意味を補った形。

問 「吾能為（ガ）二之足一（ヲ）」（5行目）について、[1]「為（ガ）二之足一（ヲ）」とは、何をしようとしているのか。

答 [2]これはどのような気持ちから出た言葉か。

[1]出来上がった蛇の絵にさらに足を描き足そうとしている。

[2]蛇の絵を早く描きあげ、酒を手に入れたことで得意になり、自分の力をひけらかしたいという気持ち。自慢する気持ち。

補 [2]会話の意図を考えさせる問いだから、この他にもいろいろなレベルの答えがあり得る。大きく外れない限り許容したい。

問 「子安（クンゾ）能為（ランヤガ）二之足一（ヲ）」（6〜7行目）とあるが、なぜ「足を描けるはずがない」と言っているのか。

答 蛇にはもともと足がないから。

問 「遂（ニ）飲（ムノヲ）二其酒一」（7行目）の(1)「遂」と、「終（ヘリ）二其酒一」（7行目）の(2)「終」は、どちらも「つひに」と読むが、意味は異なる。(1)・(2)の訳語として適切なものを、それぞれ次の中から全て選べ。

(ア) そのまま　(イ) 結局
(ウ) こうして　(エ) その勢いで
(オ) とうとう
(カ) 最終的な結果として

答 (1) (ア)・(ウ)・(エ)
(2) (イ)・(オ)・(カ)

問 「為（ルノヲ）二蛇足一者、終（ヘリ）二其酒一」（7行目）とあるが、先に蛇の絵を描いた者が酒を取られて飲めなかった理由を述べよ。

答 調子に乗って、「蛇の足」という、ありえない余計なものを付け加え、蛇を描いたことにならなかったから。

「吾不レ可（カラ）レ為（ルノヲ）二蛇足一」であったわけである。

「之」が足」の「が」は「我が家」の「が」と同じく連体修飾を表わす助詞。

6固 もちろん。いうまでもなく。もともと。

6子 「し」と読む場合は二人称の敬称。あなた。きみ。「こ」と読む場合は、子どもの意。

6安能為二之足一 反語形。「どうして蛇の足を描けるのか（いや描けるはずがない）。」反語とは、疑問の形を借りて反対の意味に帰着する形であり、「安（クンゾ）能為（クンゾランヲ）」は「不レ能（ハ）レ為（ル）」と同じ意味になる。

キー・ポイント　疑問と反語

疑問と反語は初学者が戸惑う文法事項なので、ここで疑問と反語さらには詠嘆の関係について基本的な点を確認しておこう。それは、この三者は形が同じであるだけでなく、心理のうえでも連続している点に注意すべきだということである。すなわち、疑問とは肯定せずに疑うことだから心理的に否定につながる。この気持ちが前面にでたのが反語である。また、詠嘆とは深く心を動かされたときの、言葉では言い尽くせない感情を表現するものだから、通常の平叙的な表現はとれず、疑問の形をとる。こ

の事情はなにも漢文に限ったことではなく、英語でもそうであるし、現代日本語でも例えば、「えーっ？　あの本ほんとに読んだの?!」などという会話を考えれば、疑問・反語・詠嘆が本来は一つのものであることが納得できよう。

7 遂・終　どちらも「つひニ」と読むが、意味は微妙に異なる。「遂」は、「こうして・そのまま・その勢いで」。「終」は、「最終的に・結局・とうとう」。

句法

蛇固無レ足。　否定形。「無レ…」の形で「…なシ」と読み、「…がない」と訳す。「無」は訓読では「なシ」と読み形容詞として扱うが、本来の漢文では存在を否定する動詞である。対義語である「有」が「所有・存在」を表す動詞であるように、「無」は存在を否定する動詞と考えると、理解しやすい。

子安能為二之足一。　反語形。「安二…一」の形で「いづクンゾ…ンヤ」と読み、「どうして…か、いや…ない」と訳す。初学の段階では反語を含む文の意味を取り間違える生徒が多いが、反語は「疑問の形をした否定文」であることを理解すると間違えにくい。

例　「我安学二漢文一」　私はどうして漢文を学ぶだろうか
（我安くんぞ漢文を学ばんや）
←　意味
「我不レ学二漢文一」　私は漢文を学ばない。
（我漢文を学ばず）
＊「学二漢文一」ということを否定している、と考えればよい。

「我安不レ学二漢文一」　私はどうして漢文を学ばないだろうか。
（我安くんぞ漢文を学ばざらんや）
←　意味
「我無レ不レ学二漢文一」　私は漢文を学ばないことはない。
（我漢文を学ばざるは無し）
＊「不学漢文」ということを否定している、と考えればよい。

解説

この寓話は楚の将軍昭陽が襄陵の戦役（前三三年）で魏に大勝した後、兵を転じて斉を攻めようとしたときのものである。事態を憂慮した斉の閔王のために説客の陳軫が使者にたち、昭陽の説得にあたった。陳軫は「魏軍を全滅させ、敵の将軍を討ちとったのですから最高の官位と爵位はあなたのもの」としたうえで、この例え話をし、これ以上に戦果をあげて恩賞を求めようとするのは、かえって身の破滅を招きかねない、それは蛇足を描くのと同じことだ（戦って勝たざるなくして止まるを知らざる者は、身且に死せんとし、爵且に後に帰せんとす。猶ほ蛇足を為るがごとし）と述べて、昭陽の斉攻撃を思いとどまらせたのである。今日「蛇足」というと、「余分なもの」「不要な付け足し」のような軽

い意味に用いられるが、本来はこのように、調子に乗ってやりすぎると失敗するだけでなくこれまでの成果もだいなしにしてしまう、という強い教訓を含んでいるのである。

参考までに、「戦国策」の教科書本文の前後を次に示す。授業で扱う時間があれば、寓話における「蛇の足」「酒」が何をたとえたものかを考えさせてみても面白いだろう。

［本文］

昭陽為レ楚伐レ魏、覆レ軍殺レ将得二八城一、移レ兵而攻レ斉。陳軫為二斉王一使、見二昭陽一、再拝賀二戦勝一、起而問。楚之法、覆レ軍殺レ将、其官爵何也。昭陽曰、官為二上柱国一、爵為二上執珪一。陳軫曰、異貴二於此一者、何也。曰、唯令尹耳。陳軫曰、令尹貴矣。王非二置二両令尹一也。臣窃為レ公譬、可也。

（教科書本文部分）

今君相レ楚而攻レ魏、破レ軍殺レ将、得二八城一、不レ弱レ兵、欲レ攻レ斉。斉畏レ公甚。公以レ是為レ名亦足矣。官之上非レ可レ重也。戦無レ不レ勝、而不レ知レ止者、身且レ死、爵且二後帰一。猶レ為二蛇足一也。昭陽以為レ然、解レ軍而去。

［書き下し文］

昭陽、楚の為に魏を伐ち、軍を覆し将を殺して、八城を得、兵を移して斉を攻む。陳軫、斉王の為に使ひして、昭陽に見え、再拝して戦勝を賀し、起つて問ふ。楚の法、軍を覆し将を殺さば、其の官爵何ぞや、と。昭陽曰く、官は上柱国と為り、爵は上執珪と為らん、と。陳軫曰く、異に此よりも貴き者は、何ぞや、と。曰く、唯だ令尹あるのみ、と。陳軫曰く、令尹は貴し。王、両令尹を置くに非ざるなり。臣窃かに公の為に譬へん、可ならんか。

（教科書本文部分）

今、君、楚に相として魏を攻め、軍を破り将を殺し、八城を得て、兵を弱めず、斉を攻めんと欲す。斉、公を畏るること甚だし。公是を以て名と為すに亦足れり。官の上に、重ふべきに非ざるなり。戦つて勝たざる無くして、止るを知らざる者は、身且に死せんとし、爵且に後に帰せんとす。猶ほ蛇足を為すがごときなり、と。昭陽以て然りと為し、軍を解いて去る。

［現代語訳］

（楚の将の）昭陽は、楚のために魏を伐ち、魏の軍を倒し、魏の将を殺し、魏の八城を奪うと、兵を転じて斉に攻め寄せた。（斉の閔王はたいへん心配した。）すると（楚の人で、説客の）陳軫が斉王のために使者となって楚に至り、昭陽に会見し、恭しく再拝して戦勝を祝し、立ち上がって尋ねた、「楚の国法では、敵軍を倒し、敵将を殺した場合は、（攻に対して与えられる）官爵はどんなでしょうか。」昭陽は言った、「（かかる場合は）官は上柱国（柱国の最下位）で、爵は上執珪（執珪の最上位）でしょう。」陳軫は、「そのほかに、これより貴いものは、何がありましょうか。」昭陽は、「ただ令尹（楚の宰相）があるだけです。」すると、陳軫が言った、「なるほど、令尹は最高の官職でしょうが、楚王が、二人の令尹を置かれるわけには参りますまい。臣が、内々、公のために譬え話をしてお聞かせしたいのですが、よろしゅうございましょうか。

（教科書本文部分）

いま、あなたは、楚の宰相となって魏の国をお攻めになり、魏の軍を破り、魏の将を殺し、魏の八城を奪い取りながら、その兵力を損なうことなく、さらに斉を攻めようとしておられます。斉では、公を恐れることは、たいへんなものです。公は、これだけでも、名を世にあげられるのに十分です。（今までの功績で受けられる）官爵の上に、さらに増し加えられる官爵があるわけではありません。戦って破れたことがないからと言って、（ちょうどよいところで）止まることをお忘れになると、やがてその身は死し、やがて爵位は後任の者に帰するでありましょう。それでは蛇の足を描くようなものです」と。昭陽は、それを聞いて、「なるほど」と思い、軍を解いて引き揚げた。